あつもり

ワキ詞

是ハ諸國一見乃僧にて候われ
此程ハ都に候ひて洛陽の名所
舊跡殘りなく一見仕りて候又
是より東國行脚と志し候

道行上

起ふ遠く旅のるゝ枕ぞゝ霜見
なのまたりかり衣ともだなし
う義國濃尾張おりるゝ三河國よ

着にけり〳〵
詞
急ぎ候程に三河国に着きて候又これなる沢辺に杜若のいまを盛りと見えて候立寄り眺めばやと思ひ候
サシ
実や光陰とゞまらず春過夏も来る草木心なしとは
下
申せども時を忘れぬ花の色かほよ花とも申やらんあらうつくしの杜若やな
シテ詞
なう〳〵御僧何しに其沢には休らひ給ひ候
ワキ詞
是ハ諸国一見のものにて候が杜若の面白さに眺め居て候扨爰をは何と申候ぞ
シテ
是こそ三河国

八橋と云杜若乃名にしおへん
ざれバかのこの杜若をたゞよむおもふ
花乃名所なるをも只一目ひとしほ 上九
一一下一一一一一一一
こゝろさへ旅なれて慕ふなれバ
一一、一一一一一一一
遙々か来ぬる思ひ出を語りに
一一一一一一、一一一
一一フル下一一、一、一
しをれどもわかなりめぐまれし
三三、一一一、三一 中詞
慈心なる旅人在かな さまく

三河国八はし旅の宿はいたるへ
古哥にもよまれ候ことなれバ
いにしへ大歌人の言の葉を慕ひ
業平のいろ 三下詞 伊勢物語に
ゆかしく業平八りしといふ所
ゞ行川のくもて成れバ橋を八
渡せる成れバ是は杜若のいと

面白く咲きたる杜若をある人、
かきつばたといふ五文字を
句の上に置きて旅の心を
よめと言ひければ
詞
唐衣きつつなれにし妻しあれば
ばる〳〵きぬる旅をしぞ思ふ
是ぞ在原業平なりひら衰ば杜若を

読し哥なりや　早上古ハ　むかし語や
根そば東路をへて濃國ゝきのえも
なりひらを思ひの人のめ
三下詞
さらあさりきとひとりの風
ばゝ八橋のこゝのみかなをしも
上古ハ
心ありぬ我が必取く落花を
早
ひらゝ園ゝ匠をおもひ旅

とかやむ心乃末のきろ思ひ
またまし八橋や三河乃澤衣
りきさりさ八くすめる
様をしろおもひの色を世に
乃こし家主要者になるまじ[illegible]
なまめかし業平ハいとなと
こゝに在原の語なる人を老

杜若のやう浮色か袖に
様し人も八橋のくもてよ物を
おもいるしとともも旅人乃
昔をしのふ菜乃まゝやのゝ
なまめる心の風くいつかよ
中魚か事澪なく何事よろこひ
見若しくゝ光りの庵にゆつく

一挨拶御ーありしくへ　詞　あゝ
うれしやゆるまいかわいへー
三下　なふく此殿原衣流ん
早　不思議屋かけやしききまる
かしとよるのぐちもりく居く夜を
きびし若ひさハ乃殿様若ー是
見ぬのとも言逸太刀いふぐり迄いそも

以りなの御子まてろう　三下　是さらう
此殿ふよまゆしりのしうしうれも
ぐ子殿居乃信太まゐんぐ又此
殿ハなるに一ひろのぐ鬼猿あるまし乃
五夜の慕乃殿なま居ぐのし見衰
殿原わぐ力まゐへもあらてはなわ
ウキ　加いつわかりきぬ者にてあまきぬ

ばかくて男冠めの淡人ゟ　法を
我ハ杜若の精なれバ人をおし
昔男乃杜若とよみしも女の
のきさはりくに隙まいりまゐ
ことはなかゞまこと業平ハ極楽の
歌舞乃菩薩乃化現なれバよミ
をく和哥の言の葉までもみな法

身説法乃妙文なれバ草木
までも露のめぐみに佛果乃縁を
とふらふなり　これは末世の
奇特かなまさしき非情乃草木に
言葉をかはりし法の聲　佛子を
なりや業平の濃せしかとこの
葉かの　是ゟ歌舞乃

菩薩の、かりに衆生と業平の
本地寂光乃都を出て、普く
済度利生褒ありがたき
昔ぬる夜ぐゞ昔つゝや舞哉
かなたしきまくらゝし詫乃
旧の唐衣袖を敷よ寝さしや
抑こゝの物語ハいかなる人の
なる事によりて思ひ乃露の
志のふ山忍ひてかよふ道芝の
はじめも無くなりまもなし
昔し男うゐかうふりしてなら
乃京春日乃里に志るよしして
りにいにけり仁明天皇の
御宇かとよいともかしこき

勅をうけて大内山のあるし人
ぐはや孫生殿をしめ給ふさ
一ハル下
りひのおまはりの勅使にし人
はきひらひ乃守護ゆはさる
同
上ゲ
君の恵み深きは極殿上よりて衣
之服乃みならず當時も例まれなる御
下ル
故によってみやつかへの中よりも座

下歌
猶まてよ世中はごうひあさきの人へ
一たびはおとろへはつる理りの深
なかなか乃身乃行忍びくとくる
あとにむかひて東路の方よりの雲路
一ハル
けふ猶や夜深の山にたまに大津
下
浪をこえて行くゆかしさとかし
あさの露重よすがのつやいはしくも

嶋が渡りなとうもはじめ遊ん半
志賀乃なかあさまに嶽なまさや
くゆるふわ袋遊ふさした
根ろう信濃なる浅間乃たけに
うたつ煙な、ちひら、蓑がゑやそ
とかめぬ口ひさ乃猶さ、て
藤衣三河国子第一のまごしき

なまあはれ八橋の渡也ける
杜若、兼ねうき袰遊ひなれ
ゆきゆきまし那はや思ひ出る
契人志のるに浅野のうすきは品
おかけらしの、くむわ立きは
八橋や三河乃水袋うこの那く
数しくの数、そしかなゑの人

品をうつ(?)てが、まさ(?)女ものやみ(?)
たがひのきぬわもぎ(?)して
花笠(?)乃ぞら(?)落上もの乃ぬへくき(?)
秋風明とうかにありつ(?)が流(?)生
流(?)水(?)の我うとくいきかふやいなかや
よそにひとのくきみゆの色
さぞ御(?)乃ひのるまでのまあなば(?)きや

あらぬぬ衣(?)や昔乃春ならぬ衣(?)男
ひとはいづもとし蒸(?)男よしてぞ蒸(?)覚(?)
真如乃月をやさぎ(?)法(?)場乃神と
いつまでしもごとなわひく法(?)
さらくそうじのやうてし物語
槌(?)りしたきのかな旅人いふく
きめるふうれ(?)ばみてやすひを

一、、、、一一一一一一一一
め風にしら花前よりぬすふ
二二、二二上地二九二、、、三、一、
孫ゝ与作雪袖上より菅とふ
二二二下一、二二三上、一一一一二九二
ばゝ与笛笙うへをぬー若乃
二一一一二二二一上地二二、一一一
宿掛ばの身流りくさりわきこうう
、二一一二三、二下、一一一一
暑なのやかまじく色えられさう
一一一一一、、一一一一
其りしおとこのなをとめて花
一一一下一二一二一、一一一
うたり風の匂ひ縫つあやめ乃
一、、一、、上地二、、二二一一、
り使う袋色見はまよのたわや
一、、三三二、二二、一一二一
川うわの杜若もあやめこすは母
一一一一二、一下一一、一二二一
なく色縁乃落のしろうとろもの
二二、一九、、一一一一、、二二
梅白ぬ乃き袋とかは雪乃おも
一一一一一、一一一一、、一
まろくひしあくろしのこ見落
一下、、一、、一八九一一、一
あをむくさこ我衣のきさほりさ乃
二、一一一一一一、一、一
菊もきとわ落さらう孫ひう老て

一ヽヽ二ヽ二一二一二一一九ヽヽ
ほりやとこそ寄来国おじほりや
一一一一二二二ヽ二下二二ヽ二二ヽ
どれさらう寄来国古里皆成仏の
一八九一一ヽ下一一一一ヽヽ一一八九一
見ん乃事を なそこそう勝よみ巻於